

八月八日、本町通りポケットパーク隣に造られた高さ六メートルの石像の薬師（やくし）様の落慶開眼（らっけいかいげん）の法要が行われました。

八日は薬師如来の縁日で、八日市場の地名の起りにも関する伝ということで、新たな名物と期待されます。

取り壊された薬師堂と薬師如来は、寺の歴史から考えておそらく三代目にあたり、今度の石像は、四代目の薬師如来といえるでしょう。

本町周辺は、およそ四〇〇年前ころから集落が形成されるようになってきたとみられ、文禄

元年（一五九二）の記録にも「八日市場」とあります。

八日市場の地名の起りに関する古記録に、「今の八日市場は、福岡より引き移り、元龜、天正（約四〇〇年前）ころより

## 石像の薬師

立ち始まる。八日、十二日、市あり。薬師の縁日ゆえ」というものがあります。これが書かれた正確な年代は不明ですが、大変興味ある内容です。



8月8日に行われた落慶開眼法要

医王寺に薬師様がまつられました。この像は、三〇〇年前の地図にも描かれています。

医王寺は天台宗の寺で、東栄寺の末寺でした。その本堂がおそらく薬師堂で、この二代目も天保十一年（一八四〇）の八日市場村四〇〇戸が焼けた大火で堂とともに失いました。

その後、今回取り壊された薬師堂と像がまつられたのでしよう。

八日市場の地名は、先の四〇〇年前よりさらに古い記録、応永二十四年（一四一七）に出ています。

しかし、この八日市場を現在のどの地域と考えたらよいのか、結論は出ていません。やはり「八日市場」の地名は、今回新しく造られた薬師像につながる、歴史の中から生まれたものと考えるのが適切といえるでしょう。

四〇〇年の歴史の中で、二度の大火に

薬師様がまつられ、その縁日に市が立つたとされますが、その薬師は初代といえるでしょう。

三三〇年ほど前の寛文十年（一六七〇）の見徳寺門前の大火で焼失したようで、その後、

あい、再建を繰り返してきた薬師様。近年、「市場まつり」という地名にまつわる催しも行われ、歴史の町にふさわしいものがまたひとつ生まれたといえます。